

動物救援活動のまとめ

●
ビニールハウス

ストレス

安楽死

プレハブ・パドック式犬舎

仮設か常設か？

成犬譲渡

全国の里親（神戸動物救護センター）

全国の里親（三田動物救護センター）

近畿圏の里親（神戸動物救護センターの収容犬）

近畿圏の里親（神戸動物救護センターの収容猫）

近畿圏の里親（三田動物救護センターの収容犬）

近畿圏の里親（三田動物救護センターの収容猫）

計画的派遣（1）

計画的派遣（2）

ボランティアの活躍（神戸動物救護センター）（1）

ボランティアの活躍（神戸動物救護センター）（2）

ボランティアの活躍（神戸動物救護センター）（3）

ボランティアの活躍（三田動物救護センター）（1）

ボランティアの活躍（三田動物救護センター）（2）

ボランティアの活躍（三田動物救護センター）（3）

教訓

仮設住宅と動物

お力添え

緊急事態への備え

地震感知



ビニールハウス

ビニールがもたらす防風効果と太陽熱による温室効果を利用して、野菜や花の栽培など、主に農業に用いられるものである。

真冬の最も寒い時期に地震は発生した。この寒さに耐えるのに、他の何よりも良かったかもしれない。太陽が照れば、たとえ北風が吹こうとも、内部は暖かい。時期を考えれば、最良のシェルターであったろう。しかし、最初からビニールハウスをシェルターにと、考えたわけではない。どこを探しても、テントが全くなかったのである。

間口5メートル、長さ24メートルの120平方メートルの中に、最も多いときには200頭余の被災動物を収容した。



ビニールハウス内の様子（神戸動物救護センター）



ビニールハウス（三田動物救護センター）

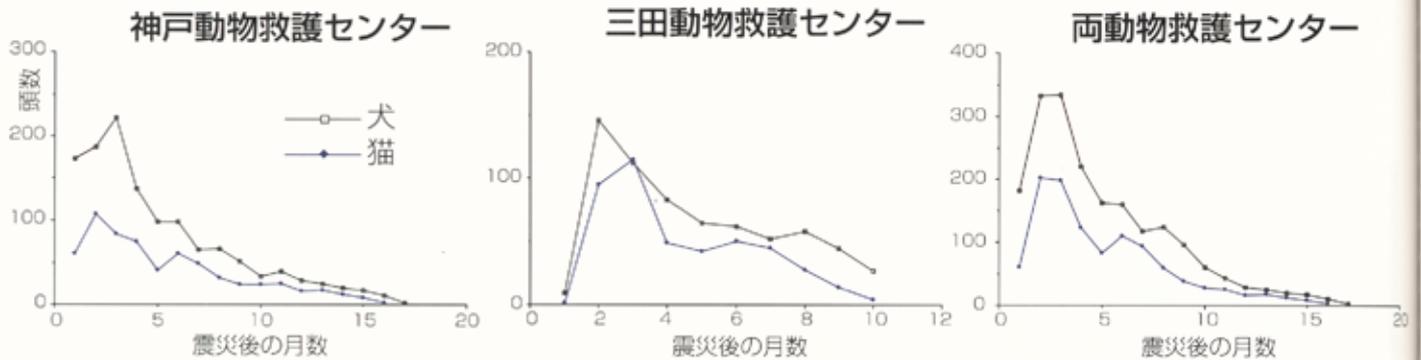


役目を終えたビニールハウス（神戸動物救護センター）

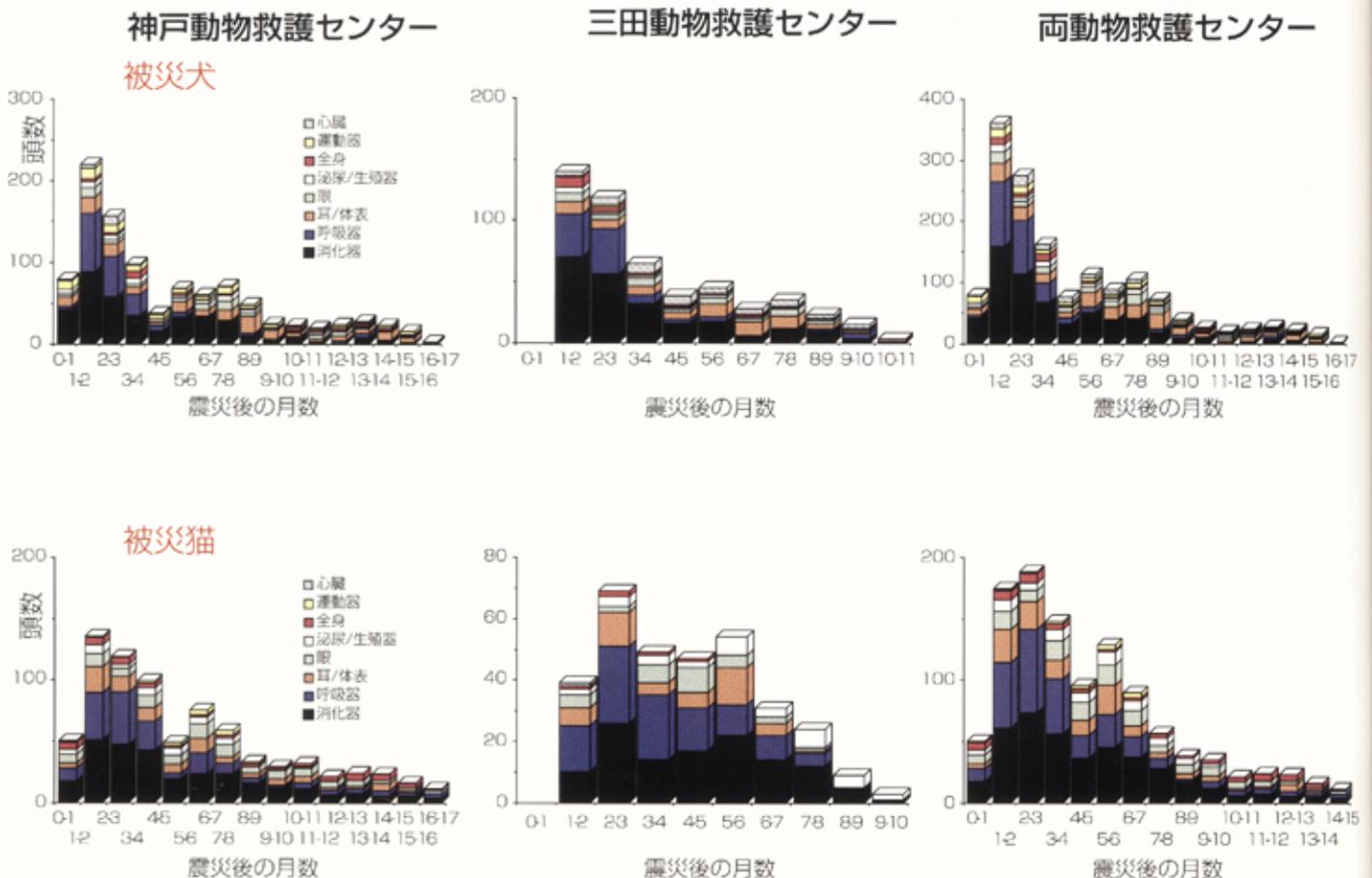
ストレス

身体状態のチェック、ワクチンの接種および各種疾病の治療を行い、また日常的には、獣医師と一般ボランティアが密接に連携し、毎日の規則的な散歩など人との接触を配慮し、初期のビニールハウスを用いた劣悪な設備のなかでも最善の飼養管理が施された。しかしながら、収容動物の多くは受け入れ時から既に何らかの身体の異常を示していた。すなわち、地震による直接的な被害とともに、飼育環境の急激な変化を受け、動物たちは明らかに疲弊していた。

被災した犬および猫の病院収容頭数の推移

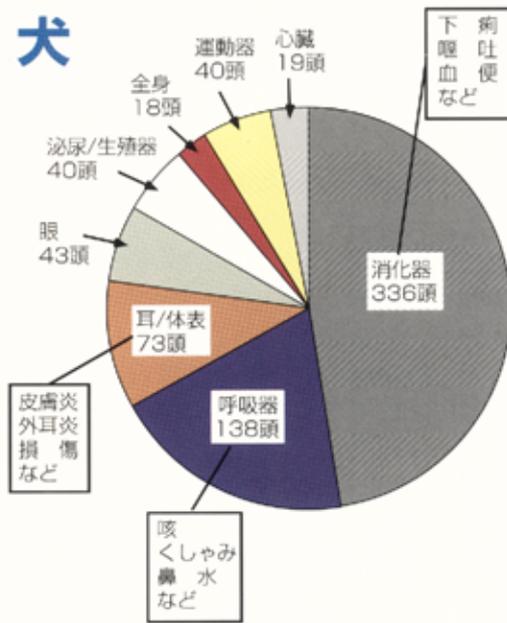


異常の認められた被災犬（上段）および被災猫（下段）の推移

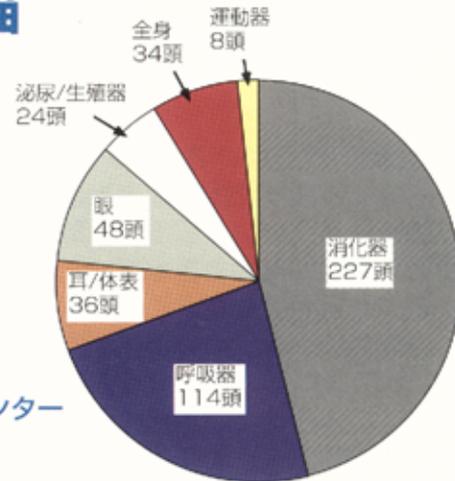


異常を認めた収容動物の部位別円グラフ

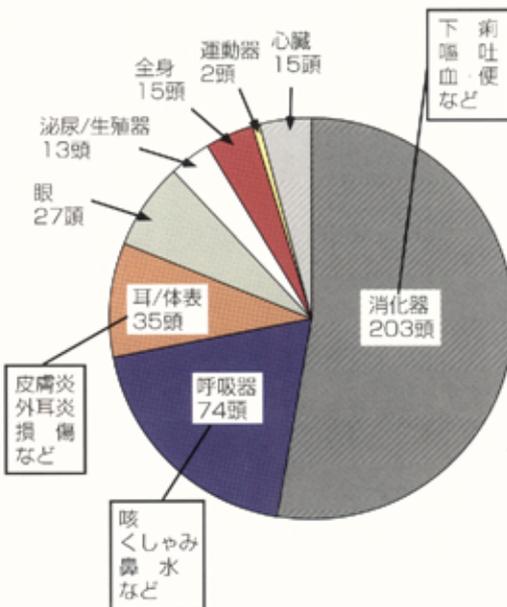
犬



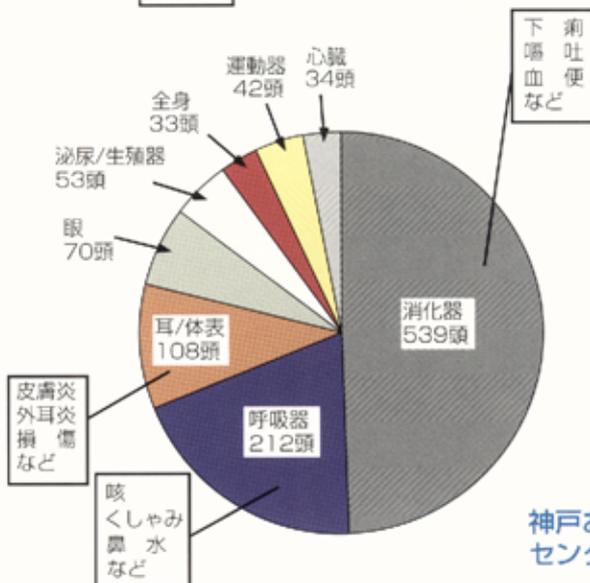
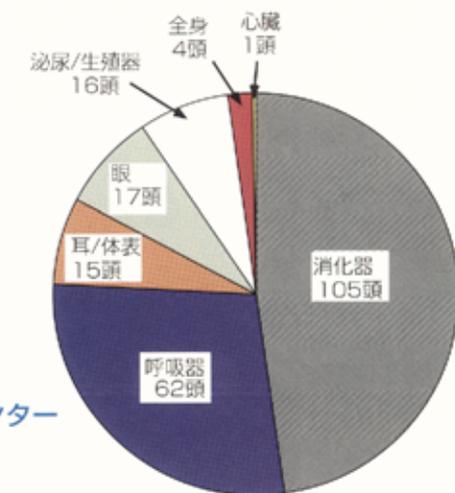
猫



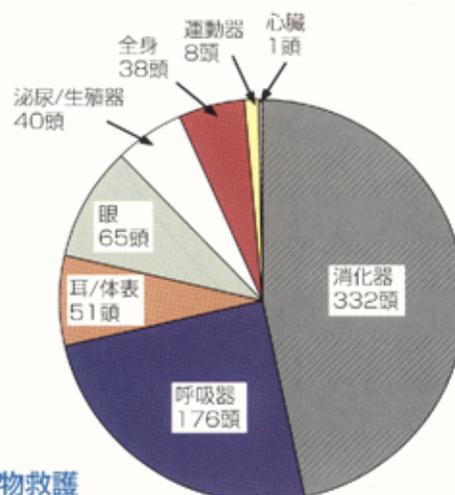
神戸動物救護センター



三田動物救護センター



神戸および三田動物救護センターを合わせたもの

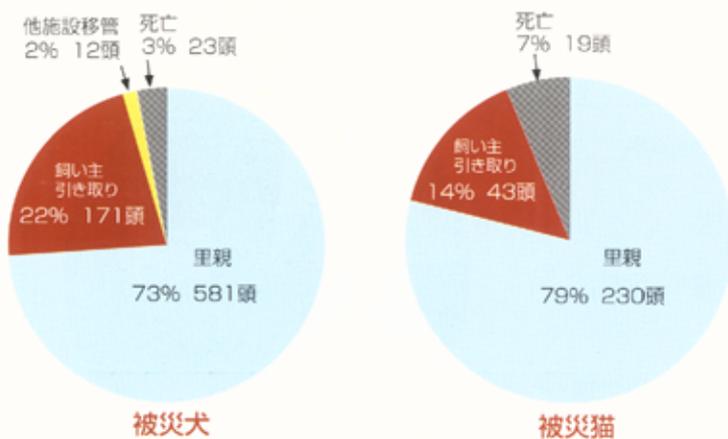


安楽死

「どうしても」飼えないことが、確かにある。近代都市を襲った今回の大地震は、頭でしか物事を理解しない人には、理解が困難な出来事がいくらでもあった。その一つが動物の「安楽死」である。地震災害の報道が一段落ついたころ、新聞、雑誌でも動物の「安楽死」を扱った記事を目にすることがあった。

兵庫県南部地震動物救援本部は、保護収容した動物すべてが、元の飼い主か、あるいは里親に引き取られるまで、活動を続けることを宣言してスタートした。決して「安楽死」はさせない。もちろん、収容された動物のなかには、負傷が癒えずに死亡したり、あるいは救護センターで発病し、手当の甲斐もなく、死亡したものがいた。しかし、どんなに老齢であろうと、どんなに重症であろうと、また重い障害を持ってしようと、安楽死させることはなかった。

しかし、地震直後の混乱期には、安楽死を求める飼い主が少なからずいた（「神戸市ならびに兵庫県獣医師会々員へのアンケート調査」から、資料篇参照）。また、実際に安楽死を求められ、獣医師としての責任において、やむなく執行した獣医師もいた。「どうしても飼えない。例え施設があっても、自分の手のなかで」との思いがあったという。



神戸動物救護センターで、手当の甲斐もなく死亡した被災動物は42頭であった。腎不全、フィラリア症など内科疾患が死因の主なものであった。



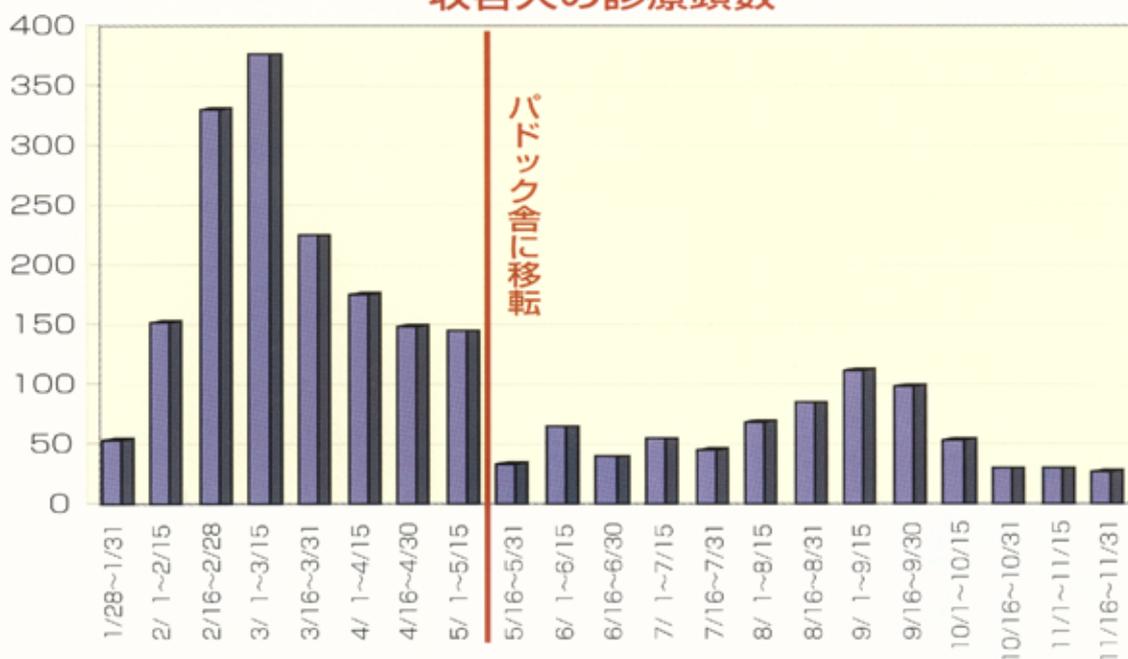
手当の甲斐もなく死亡した被災犬
(神戸動物救護センター)

プレハブ・パドック式犬舎

誰もが大きな庭がある広い家に住みたいと思う。恐らく、動物たちも同じであろう。神戸動物救護センターでは、5月13日に新しいプレハブ・パドック式の犬舎が完成した。収容犬はその日のうちに、ビニールハウスの施設から、新しい「広い家」に移った。

動物たちは、とたんに病気から解放された。

収容犬の診療頭数



(神戸動物救護センター 平成7年1月から11月)



プレハブ・パドック式犬舎
(神戸動物救護センター)



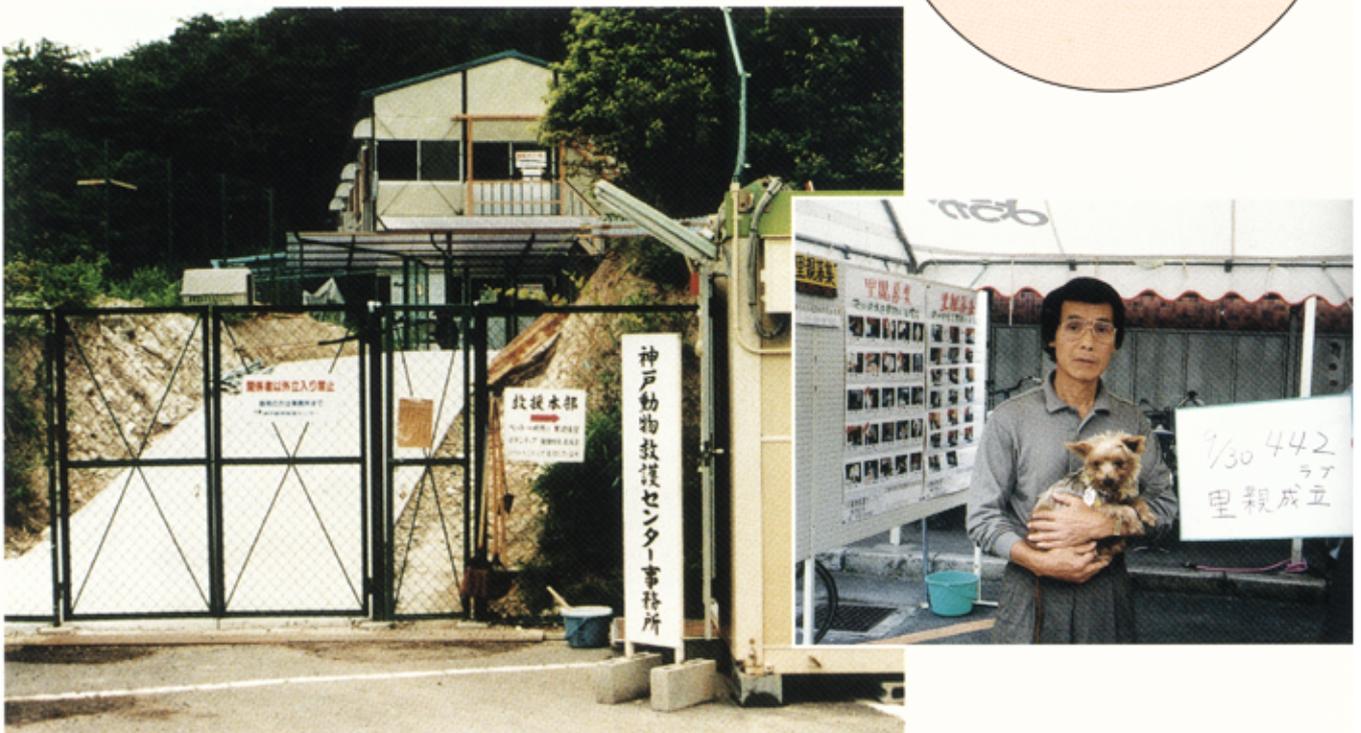
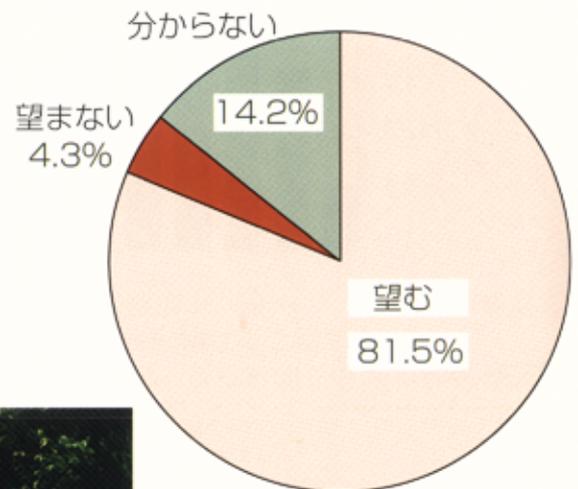
パドック内の収容犬 (神戸動物救護センター)

仮設か常設か？

兵庫県南部地震動物救援本部が行なった里親ならびに一時預りの飼い主に対するアンケート調査がある。「今後も引き続き、成犬および成猫の譲渡ができる施設の運営を望みますか？」に対して、「望む」が圧倒的に多く、「望まない」はわずか4.3%にすぎなかった。

「望む」と回答した人の多くは、「動物愛護」の意味から必要と考えているようである。「望まない」と答えた人は29名しかいなかったが、その理由に「安易に動物を手放すのは反対」、「飼い主は責任をもって飼うべきである」と答えている。動物が人と同じような扱いを受けることが「動物愛護」とすれば、やはり安易に譲渡するのはおかしいことになる。

しかしながら、感情的にはともかく、どんなに動物愛護精神が高揚した国でも、「人間」と「動物」が等価的に扱われることはない。「人間の責任」において、「動物を飼う」ことが何よりも重要であると言えない。飼い主の責任の一つに、「動物の譲渡」は有りうるということかもしれない。



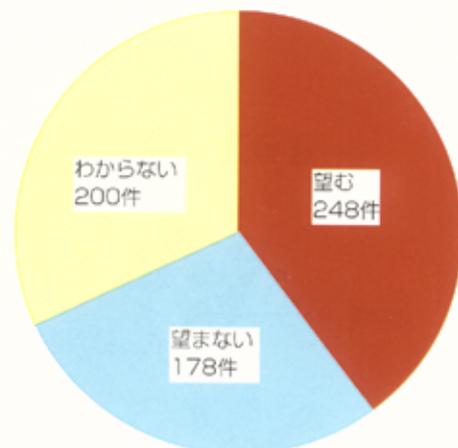
神戸動物救護センターの新しい施設 平成7年5月13日完成 翌年8年6月末に解体された

成犬譲渡

兵庫県南部地震動物救援活動で収容した被災動物は、1,556頭のうち約85%は、1才以上の成犬および成猫であった。里親に引き取られた1,045頭もほぼ同じ年齢構成であったと思われる。したがって、いわゆる成犬、成猫譲渡が行なわれたことになる。里親ならびに一時預りの飼い主へのアンケート調査に、「成犬、成猫の譲渡を望みますか？」（設問9-2）があり、28.4%は「望まない」と答えている。その理由の多くは、「大きくなってからはなつかないことが多く」、「前に飼われていた環境と異なり、躰が大変」と答えている。また、体験談として、「成犬でなつくの1年かかった」と回答した人もいる。まさにその通りであり、一般的に、子犬、子猫の方がなつきやすい。ここでは、成犬の利点を考えてみよう。



里親募集 / 吹田市 平成7年9月23日



「成犬、成猫の譲渡を望みますか？」
（設問9-2）。
（里親ならびに一時預りの飼い主への
アンケート調査から）

成犬の利点

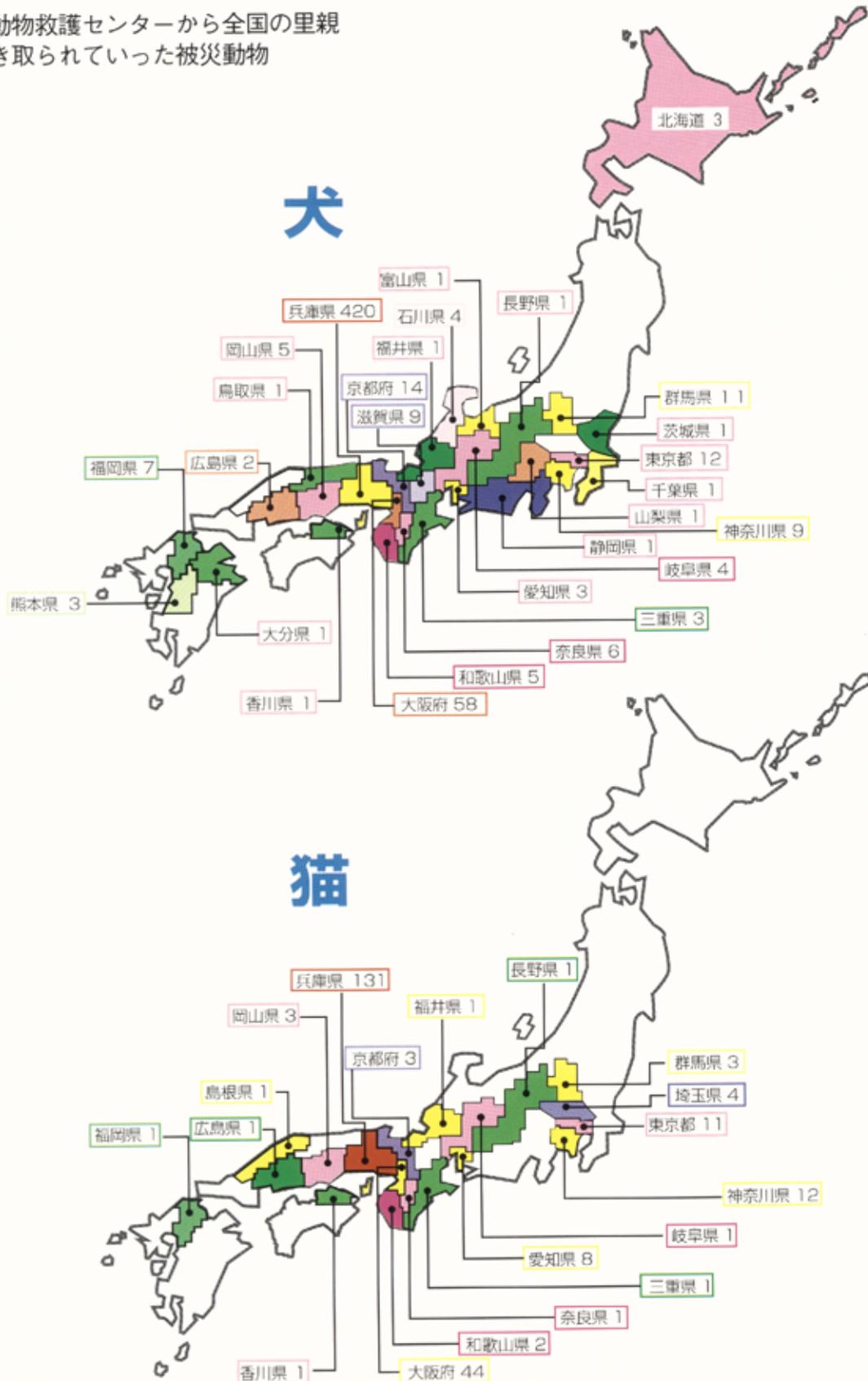
- 1、犬の性格がつかみやすい。
- 2、体型がはっきりしている。
- 3、おおよそ躰られている。
- 4、いたずらや甘え鳴きに悩まされない。
- 5、犬の行動に落ち着きが見られる。
- 6、成犬の方が心が通いやすい。
- 7、高齢の方には、高齢の犬の方がよいかもしれない。
- 8、手のかかるほど、愛情が増す場合がある。



里親募集 / 姫路市 平成7年10月21日

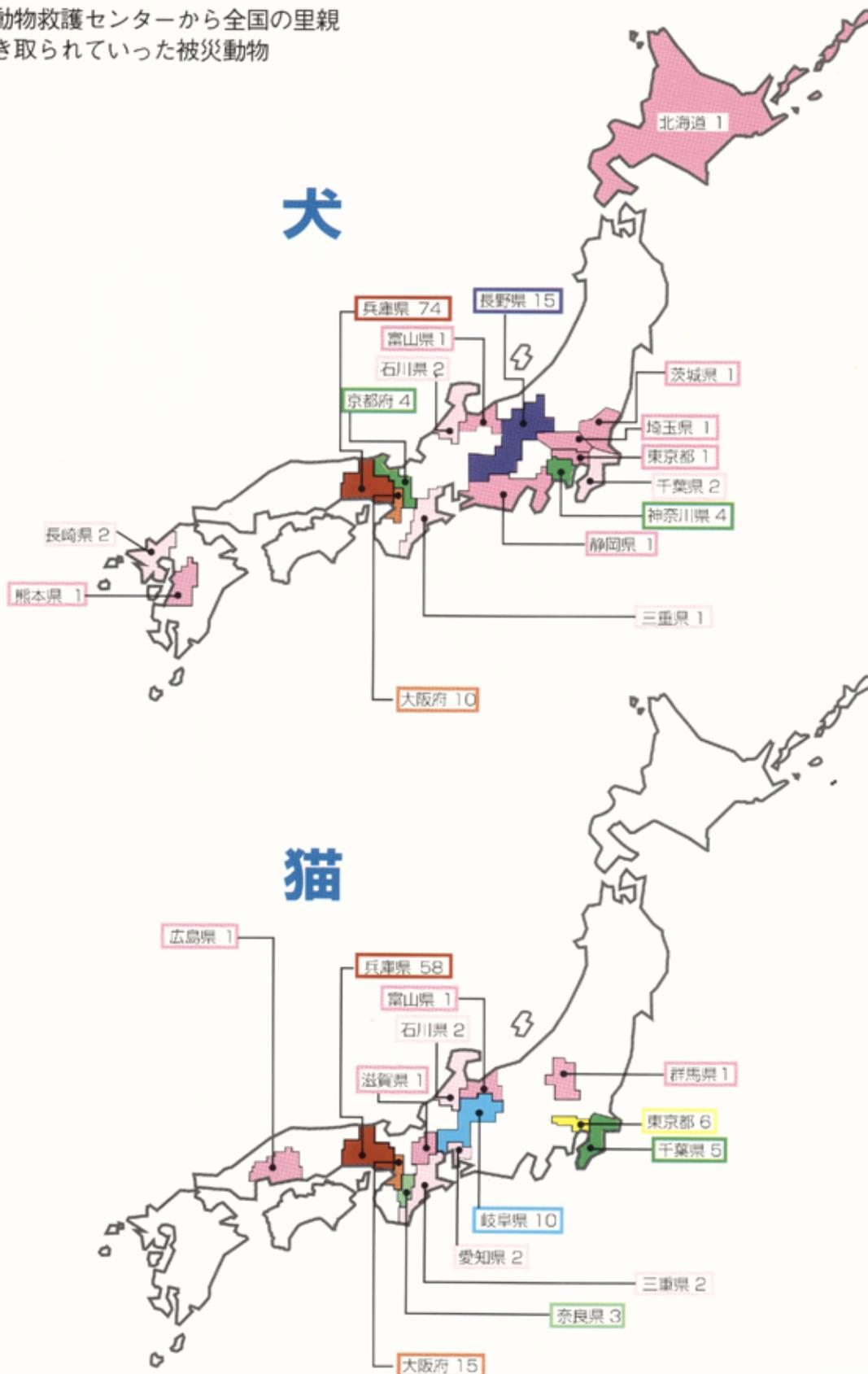
全国の里親（神戸動物救護センター）

神戸動物救護センターから全国の里親
に引き取られていった被災動物



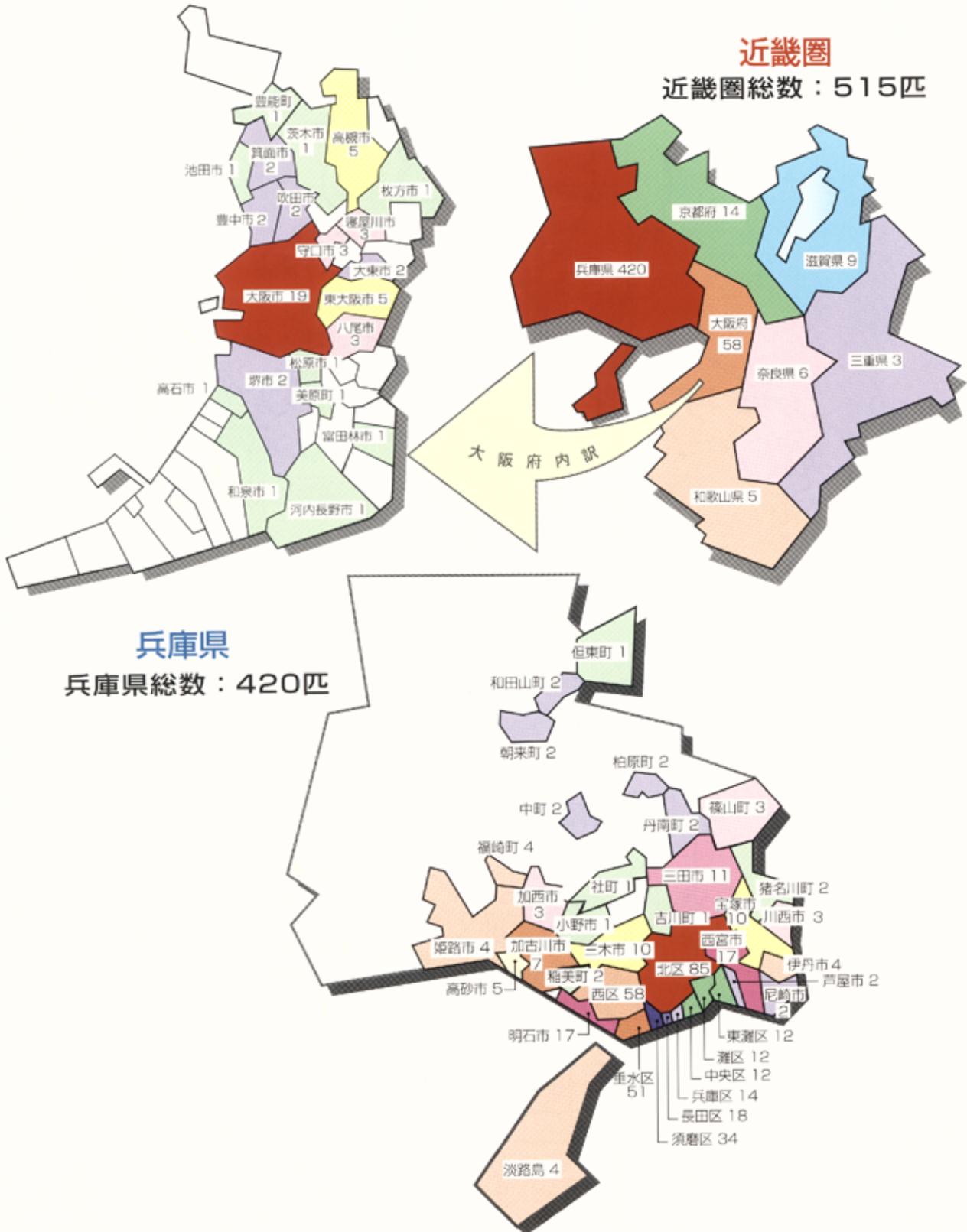
全国の里親（三田動物救護センター）

三田動物救護センターから全国の里親
に引き取られていった被災動物



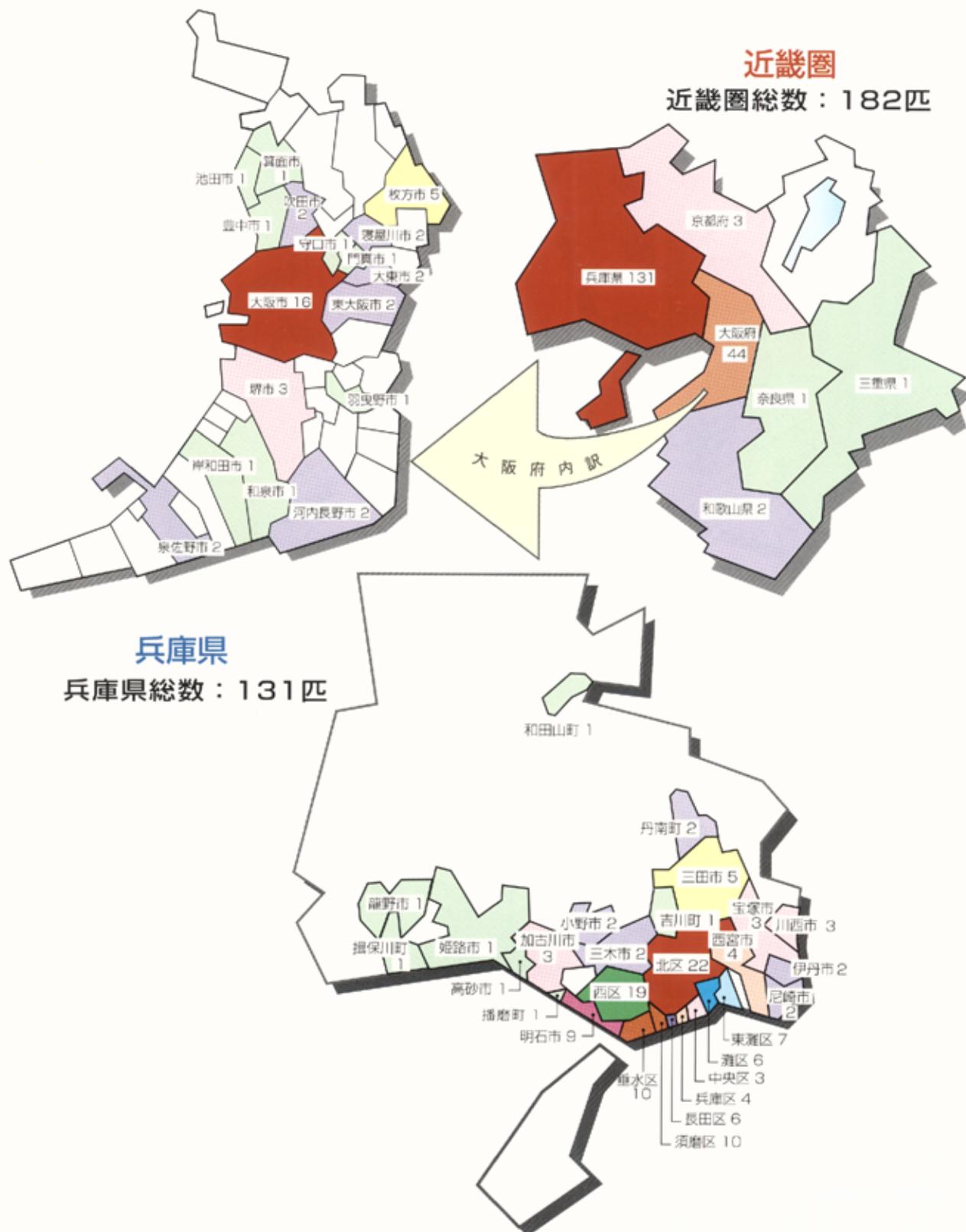
近畿圏の里親 (神戸動物救護センターの収容犬)

神戸動物救護センターから近畿圏の里親に引き取られていった被災犬



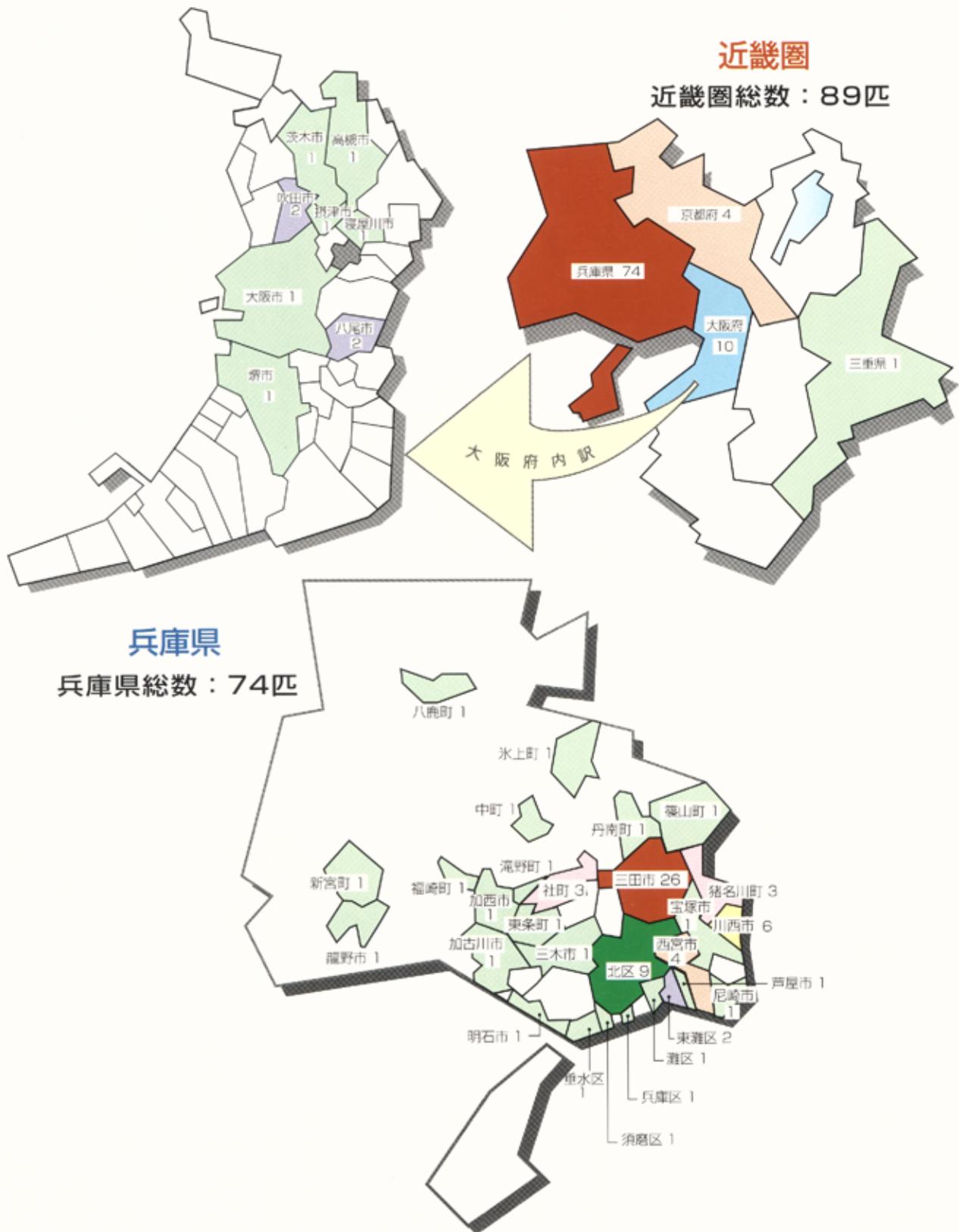
近畿圏の里親 (神戸動物救護センターの収容猫)

神戸動物救護センターから近畿圏の里親に引き取られていった被災猫



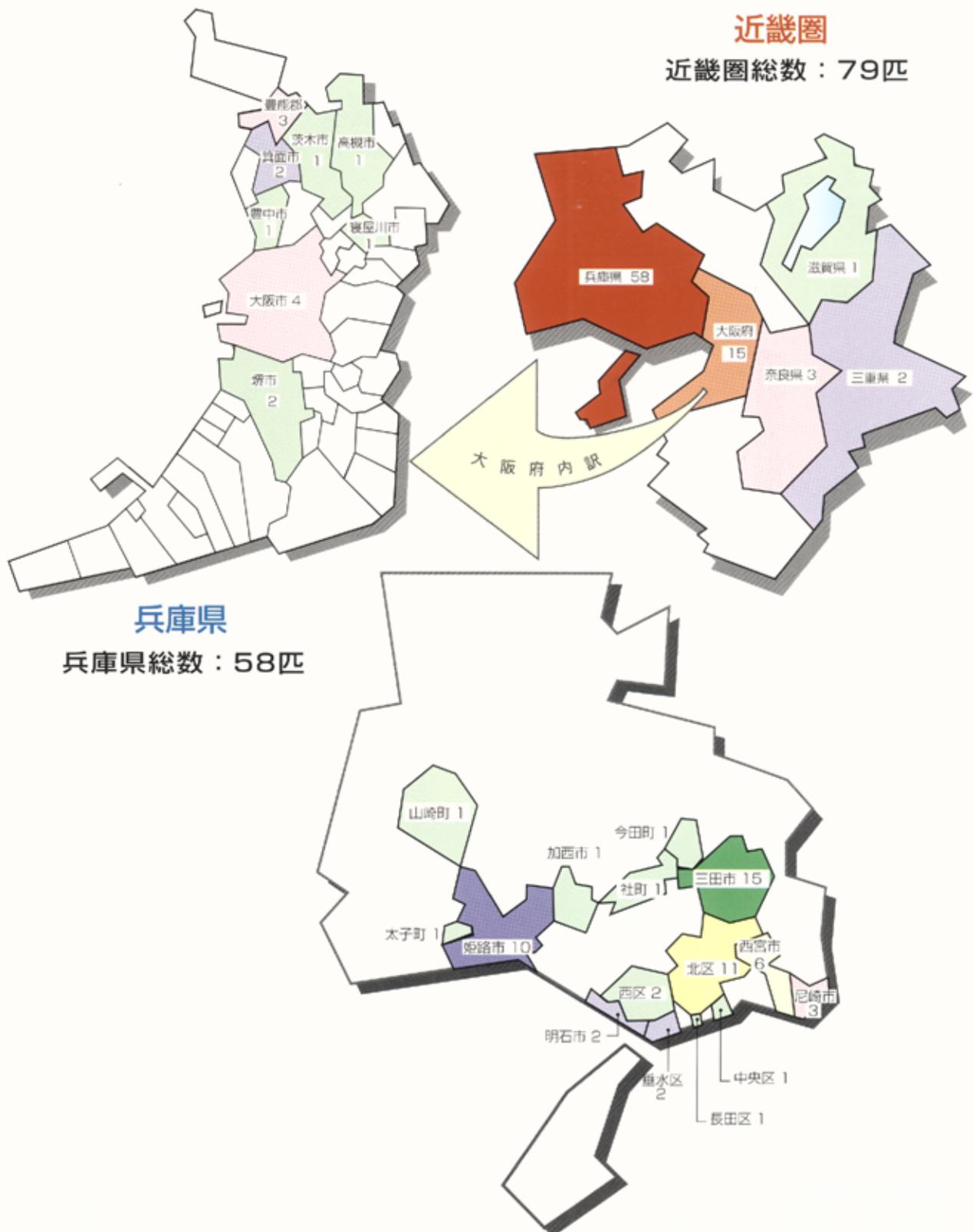
近畿圏の里親 (三田動物救護センターの収容犬)

三田動物救護センターから近畿圏の里親に引き取られていった被災犬



近畿圏の里親 (三田動物救護センターの収容猫)

三田動物救護センターから近畿圏の里親に引き取られていった被災猫



計画的派遣（1）

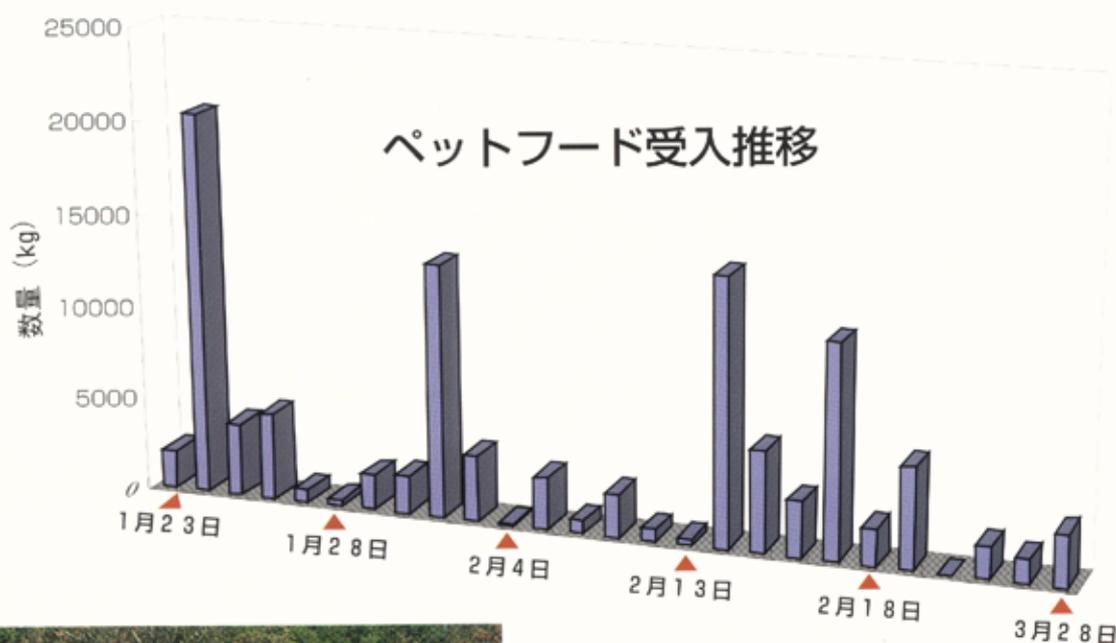
相互の理解のもとに、スケジュールを立て、物事を実行する。今回の動物救護活動で、この計画性が特に要求されたのは、1) ペットフードおよび医薬品類の供給、2) ボランティアの派遣の二つであった。

ボランティア学生は「・・・ペットフードについて、どんな考えだったのか知らんけど、一度にあんな量を送ってくるのは、少々冷静さが足りん。予想される動物の数と製品ペットフードの消費期限で考えたら絶対に余ってしまう量で、第一置き場がない」と、嘆いた。

神戸および三田動物救護センターの要求に応じて、救援本部から東京本部に必要数量を連絡し、送付されてくる。しかし、一度に大量のペットフードが送られてきた。結果的に、一部は賞味期限を過ぎて保管することになった。

決して有り余ったわけではないが、医薬品類にも同じことがありえた。有効期限の近い医薬品類が多く持ち込まれたことが一つの原因だったかもしれない。

救援物資が有効に使われるために、収容動物の数と収容期間を考慮し、計画的に送ることが重要なポイントである。



計画的派遣（2）

ボランティア活動が円滑に営まれるためには、最低限の人数が必要である。しかし、多ければ良いというものではない。適正な人数が居て、始めて十分に機能する。学生ボランティアは、休みになると、溢れるほどに駆けつけてくれた。しかし、授業があれば、そうはいかない。大きな災害時には、休みをスライドさせるなどの工夫があってもよい。

獣医師ボランティアは、もっと切実である。経験と十分な知識がある獣医師が長期間、ボランティア活動続けることは困難である。組織と現場が、密に話し合い、詳細なスケジュールを立てることが何よりも重要なことであろう。

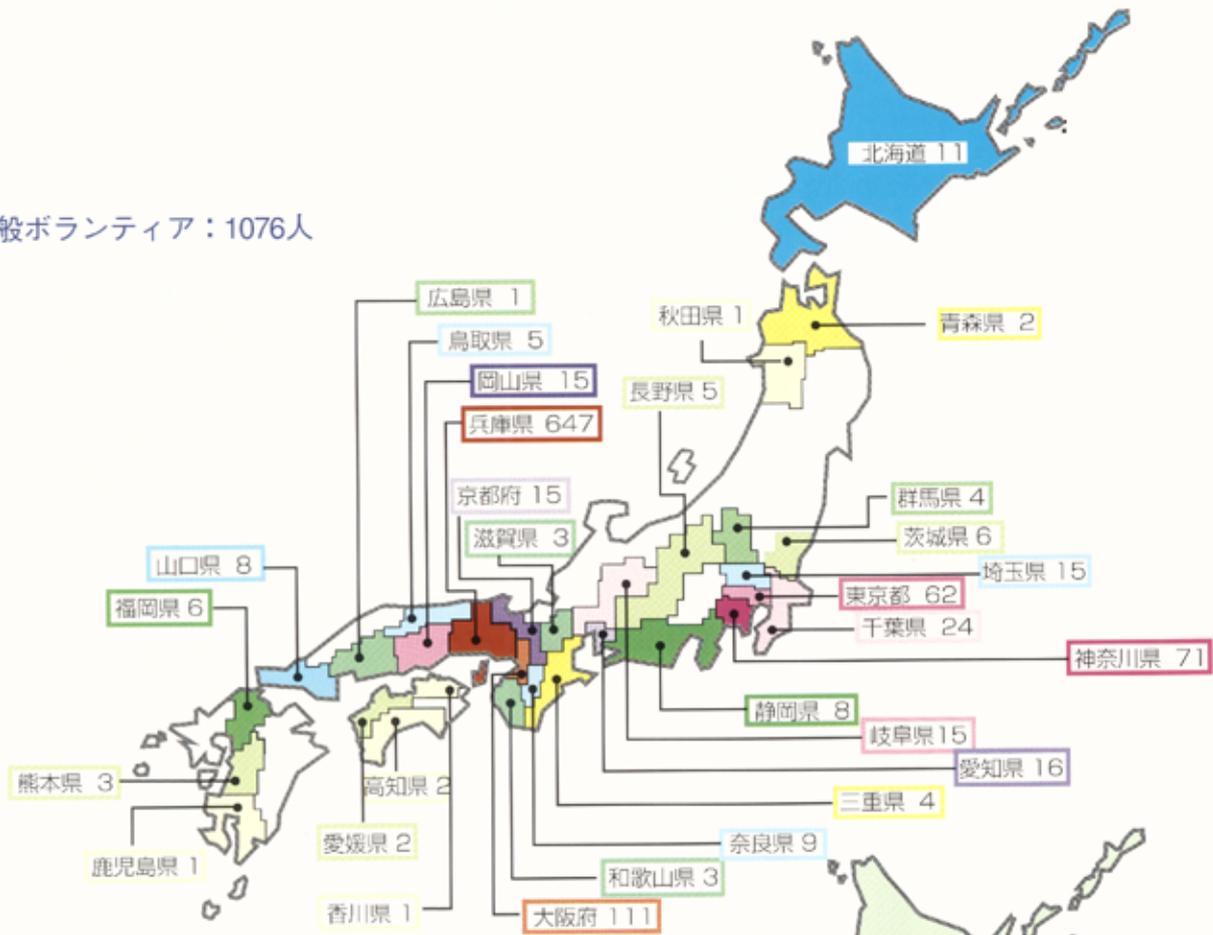
（社）大阪府獣医師会、（社）大阪市獣医師会、および（社）横浜市獣医師会などが実施した計画的な獣医師派遣は、今回のボランティア活動に大きな成果をもたらした。

神戸動物救護センターの獣医学生ボランティア

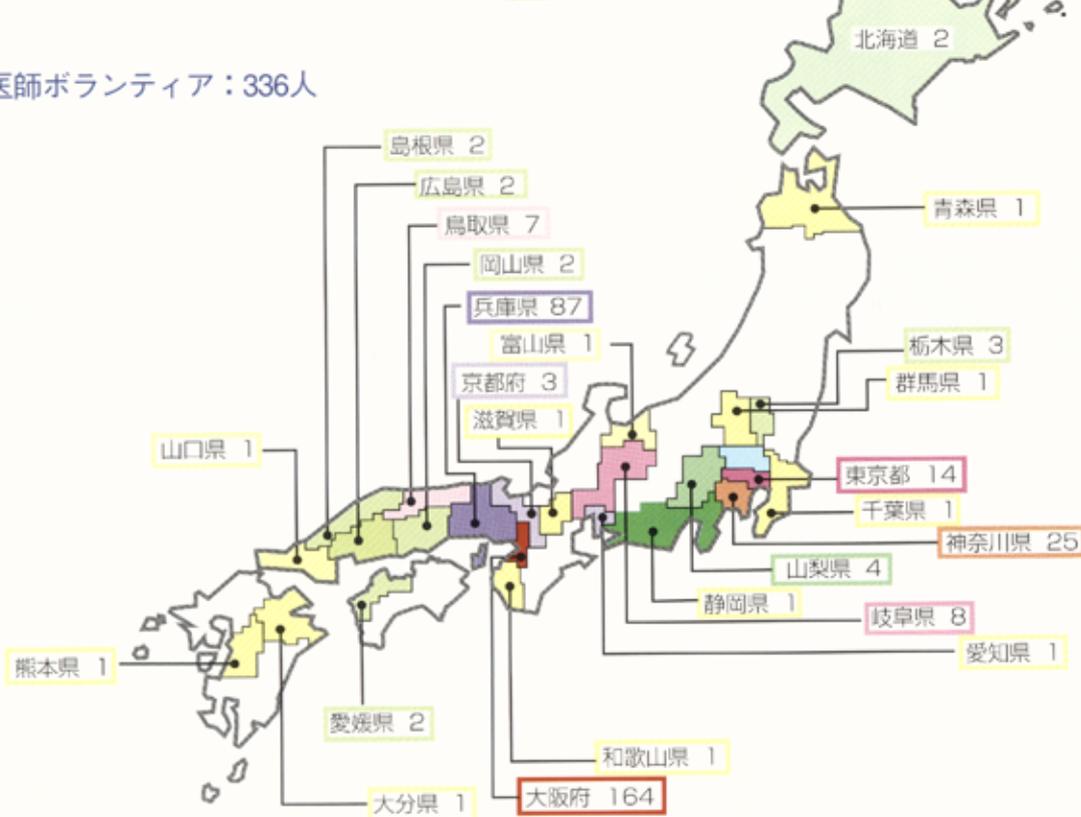


ボランティアの活躍 (1) 神戸動物救護センター

一般ボランティア：1076人



獣医師ボランティア：336人

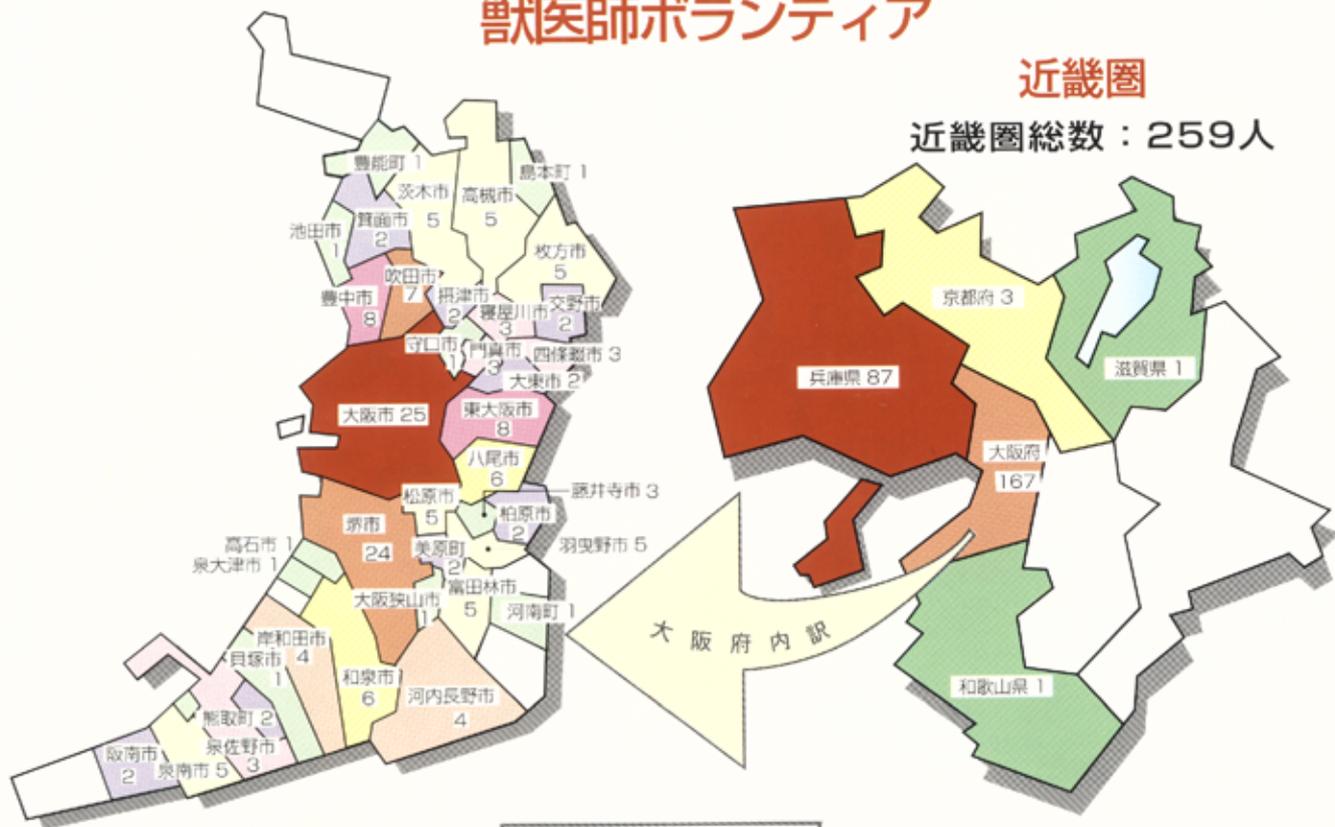


ボランティアの活躍 (3) 神戸動物救護センター

獣医師ボランティア

近畿圏

近畿圏総数：259人



兵庫県

兵庫県総数：87人





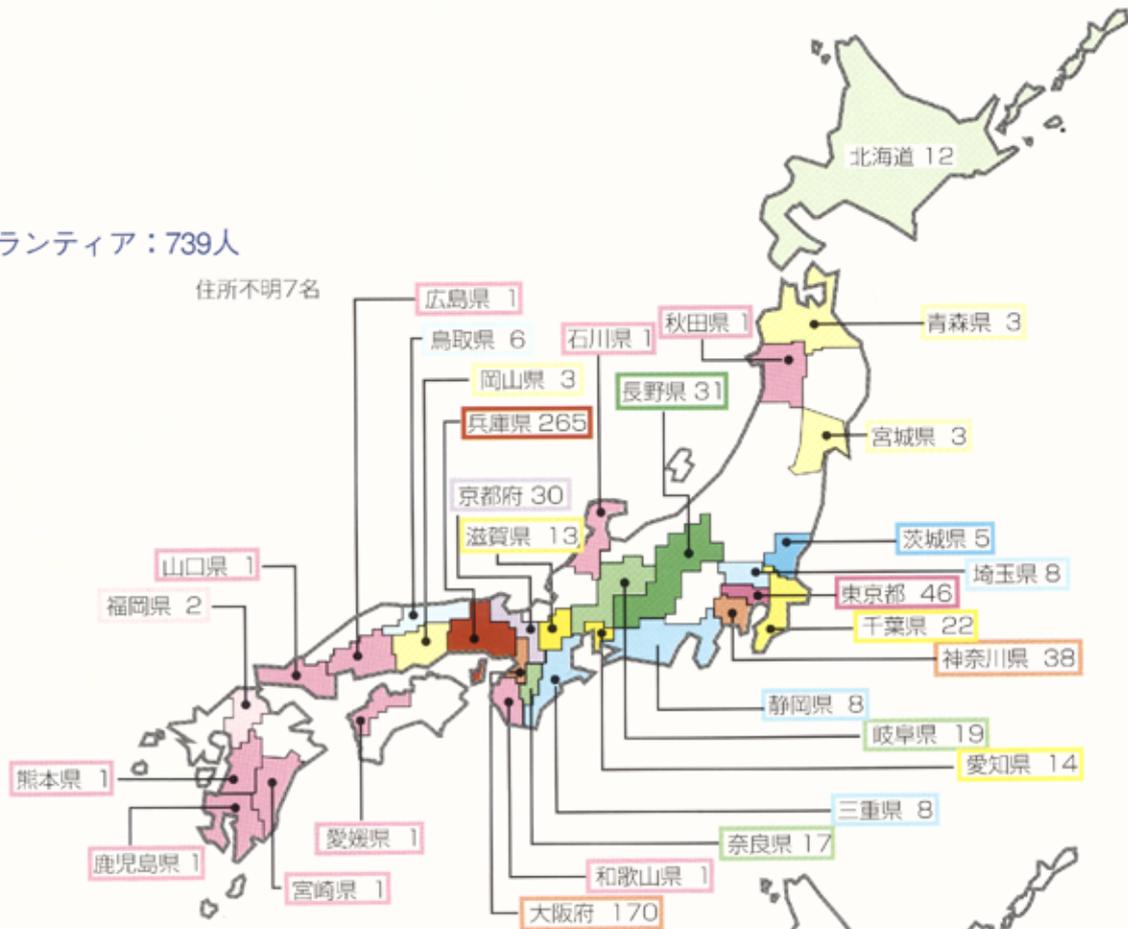
神戸動物救護センター

ボランティアの活動風景

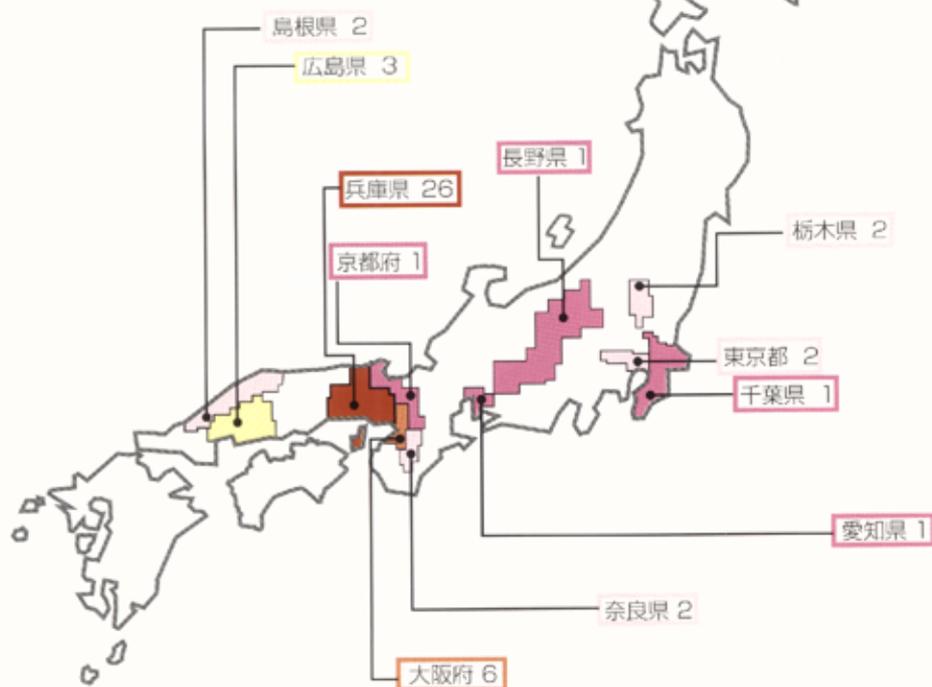


ボランティアの活躍 (1) 三田動物救護センター

一般ボランティア：739人

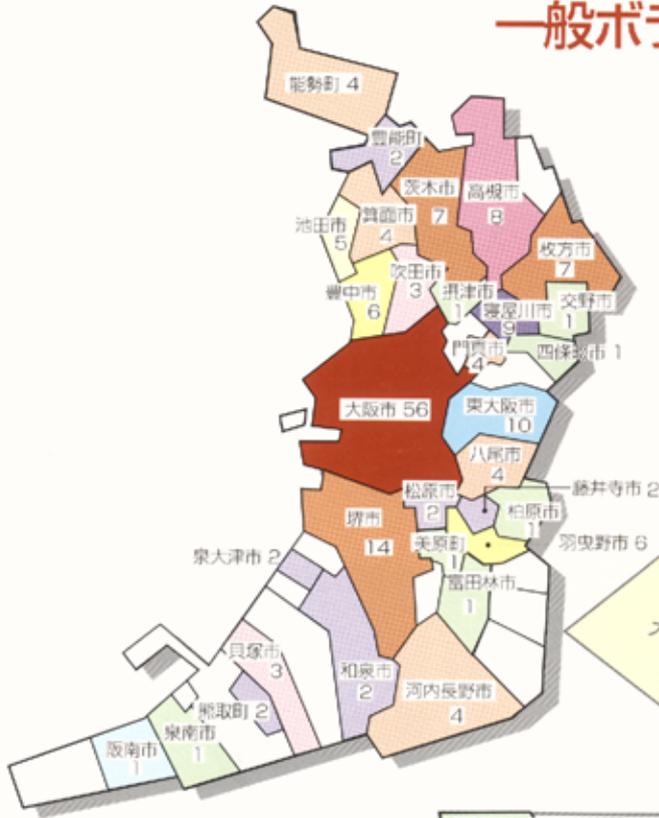


獣医師ボランティア：47人



ボランティアの活躍 (2) 三田動物救護センター

一般ボランティア



近畿圏

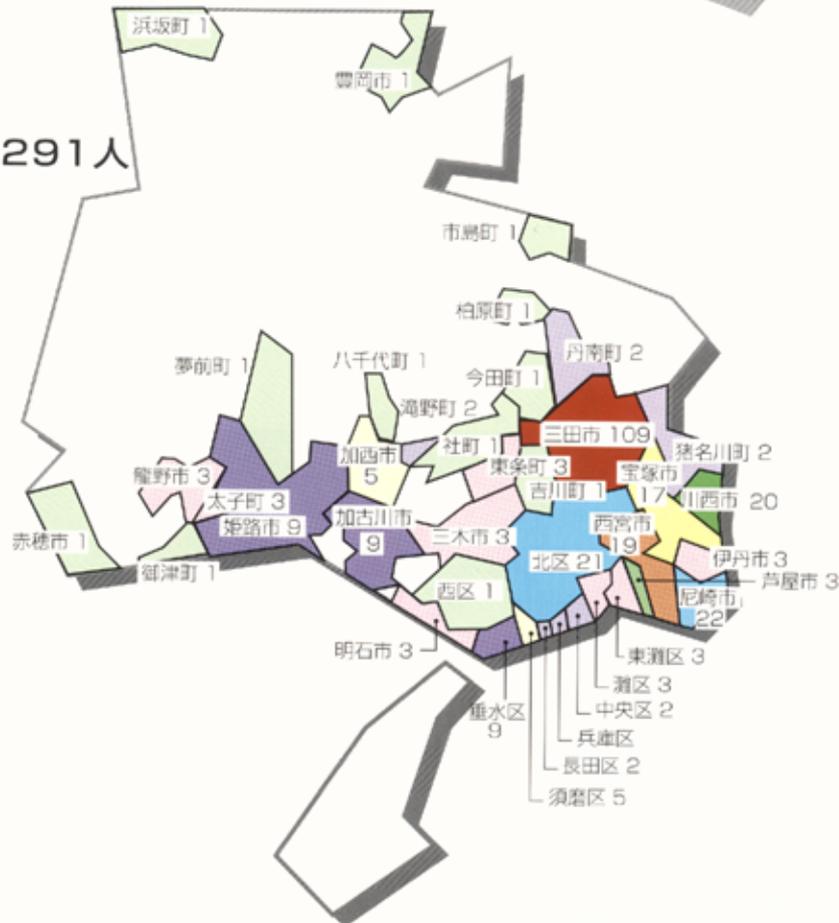
近畿圏総数：536人



大阪府内訳

兵庫県

兵庫県総数：291人



ボランティアの活躍 (3) 三田動物救護センター

獣医師ボランティア

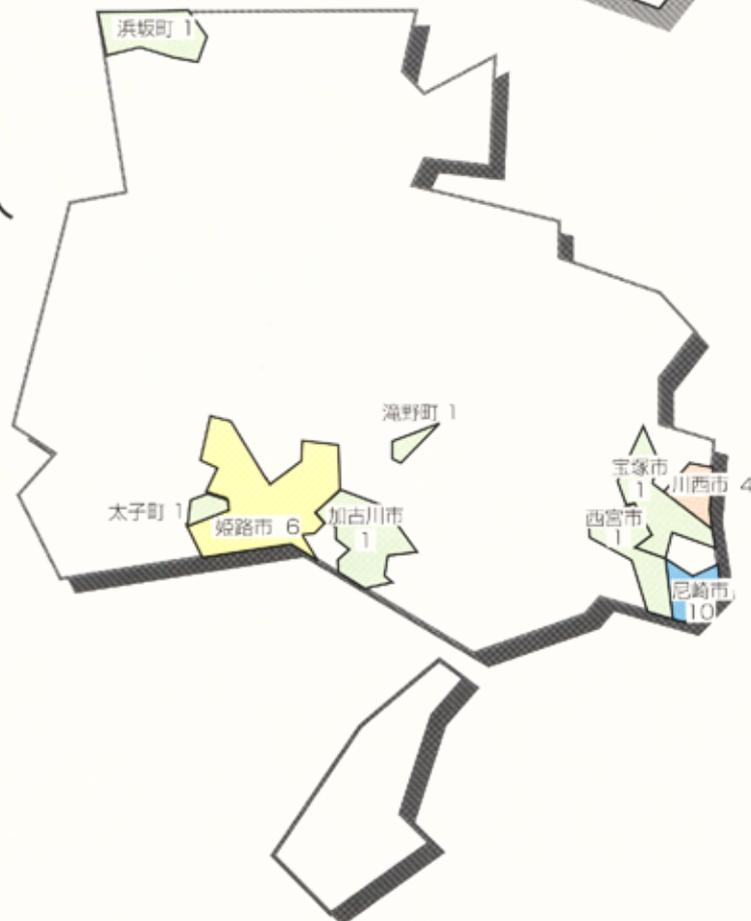
近畿圏

近畿圏総数：35人



兵庫県

兵庫県総数：26人





三田動物救護センター

ボランティアの活動風景



教訓

アンケート調査「動物救護ボランティアの現場から」の回答（回答数473）のうち、貴重な意見を出来る限り原文にそって、掲載してみる。

- (良い点)** 皆で協力しあえた35人
- 仕事の指示が行き届いていた25人
- (悪い点)** 作業の指示系統が不明、仕事がスムーズにいかない84人
- 人間関係で問題があった22人
- ボランティアの人数調整の不備20人
- (改善の要あり)** ボランティアの人数調整46人
- 仕事の説明、分担をして欲しい29人
- 仕事の引き継ぎをきちんとする16人



ボランティア参加数

	神戸動物救護センター	三田動物救護センター
1/26~2/14	64	
2/15~2/28	84	
3/1~3/15	89	61
3/16~3/31	85	70
4/1~4/15	68	55
4/16~4/30	57	38
5/1~5/15	45	29
5/16~5/31	31	23

1/26~5/31のボランティア総数、約12,500名。1日当たりのボランティア参加数は、神戸動物救護センター約65名、三田動物救護センター約46名であった。

仮設住宅と動物

仮設住宅での「ペット飼育」

**モラル守れば
大丈夫だが…**

**行政の対応あいまい
入居あきらめも**



仮設住宅でのペット飼育は、被災者の生活再建に大きく貢献している。しかし、行政の対応が追いついていない現状がある。被災者の生活再建に大きく貢献している。しかし、行政の対応が追いついていない現状がある。被災者の生活再建に大きく貢献している。しかし、行政の対応が追いついていない現状がある。

森内利郎院長 アルファ獣医科病院（東灘区）

（前略）

仮設住宅へ往診に行くと思う。お年寄りの一人暮らしでも、ペットと一緒に暮らしている人は、なんとなく生き生きしてる、楽観的で余裕がある。ペットのいる人同士で仲良くなったりするみたいだし。どう見ても年金暮らしという人が多いけど、そんな人ほどきっちり診療費を払おうとしてくれる。やっぱりね、そんな人ほど診療費をまけといてあげようという気になります。ここだけの話だけど、金持ちの患者さんほど、けちけちしてますよ。今、心配に思っているのがペットを飼っている人が仮設から公営住宅へ移るとき。公営はペット禁止でしょ。なんとか柔軟な態度か対応がとれないのかな。ペットを飼える棟を一棟だけ作るとか。鳴き声がうるさいとかいうけど、人の子だって泣きますしね。震災のとき、家が壊れても、飼い猫がいるから外へ出られなかったお年寄りもいたらしいんです。「わしゃここで死ぬんや」って、猫を抱えて、それで暖とって。そんな人からペットを取り上げるとどうなるか。「生きがい」なんですから。

（神戸新聞・夕刊 1996.11.8「震災聞き語りザ・仕事」から）

これらの手紙は貝原俊民県知事宛に届けられたものです

（前略）

尚、被災者の方に仮設住宅を提供して下さる事になりましたが、ここでまた、新たな悩みが私にはあります。雲仙の被災飼い主の気持ちを理解して戴き、雲仙の被災動物のように泣き泣き動物を捨てなければならぬような事はさせないで戴きたいと思うのであります。一緒に生活を共にしていた動物をどうか、飼い主と共に暮らして行くことが出来るように、知事さまのお力をお貸しくださいませ

—（後略）—

（主婦A）

（前略）

新聞報道によれば、仮設住宅での犬猫などのペットの飼育が禁止されているとのこと。それが事実としたら、行政は大きな間違いを犯していると思います。今、この災害時の非常事態の中で被災した人達にとって何とか共に生きのびた犬猫などのペットは最良の伴侶になっています。この非常時に心の問題が大きな問題にもなっています。ひとつの社会不安の要因となる可能性も大きいと思います。そのようなときに犬猫などのペットがどれだけ大きな心の慰めになるかはわかり知れません。逆に仮設住宅に入ることにより、愛する動物と別れなければならぬストレスは、非常に大きいと思われます。ペットを飼う殆どの人にとってペットは家族の一員とも被災者の心理状態に配慮した行政をお願い、ペットも一緒に生活できるような仮設住宅の設置をして戴くようお願いするものです。

—（後略）—

（西宮市民）

お力添え

5月25日、神戸動物救護センターは常陸宮殿下ならびに妃殿下のご来訪を受け、励ましのお言葉を頂いた。

また、高円宮家は、神戸動物救護センターから1頭の被災犬を引き取られた。「何とかしなくては」との思いと、飼える環境があると判断されてのことである。引き取ったあと、多少の問題はあったものの、今では良く慣れて元気に暮らしているという。



常陸宮同妃両殿下ご感想

平成七年五月二十五日

震災で亡くなられた方のご冥福を祈るとともに、被災された皆様に心からお見舞いいたします。

本日、地震の凄まじさを目のあたりにして、仮住まいを余儀なくされておられる皆様の今日までのご苦労と将来への不安には、計り知れないものがあると思います。

生活の再建や産業の復興に向けて、関係者の方の懸命な意欲がひしひしと感じられ、敬意を表します。

終わりに、震災に遭った動物達にも暖かい救護活動を行っておられることを嬉しく思いました。



ドフィー、高円宮妃久子殿下

震災「孤犬」高円宮家へ

神戸動物救護センターから

阪神大震災で飼い主とはぐれたペットを保護している神戸動物救護センター（神戸市北区）で生まれた子犬「写真Ⅱ」が東京・赤坂の高円宮家に引き取られた。

ドフィーと名付けられ、長女承子さま（みかこ）と仲よく遊んでいる。

薄茶色に白い毛が交じるオスの雑種犬。体長は約四〇センチ。地震直後、母犬が同市西区で迷っているところを保護され、四月二日に他の三匹とともに生まれた。五月に同センターを訪問

した常陸宮ご夫妻から、六匹のペットが飼い主を求めると聞いた高円宮ご夫妻が申し出て、今日一日

に赤坂御用地内の宮邸に。高円宮妃久子さまは「かわいそうな犬や猫がいることを多くの人に知ってほしい」。センター（078・741・8112）では、飼い主になれる人や義援金を募集している。

（毎日新聞 夕刊 1995.6.9）

緊急事態への備え

〈通信機器と設備〉

- 移動無線
- 携帯ラジオ（受信機）
- 携帯電話
- 必要な量の電池
- 基地備品

〈動物を管理するための車両〉

〈動物の収容備品〉

- 犬猫用ケージ
- 独立犬舎
- 隔離犬舎
- 犬猫以外の動物用檻
- 犬猫用の携帯用ケージ（ハンドケース）
- 犬猫生け捕り用の道具

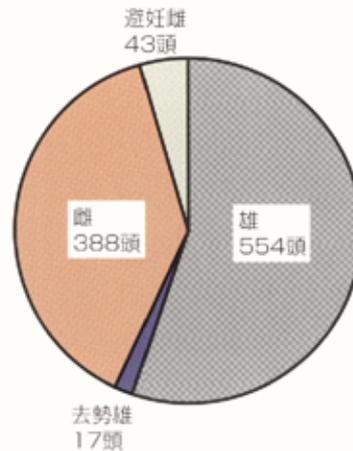
〈日頃から準備しておくもの〉

- 鑑札・迷子札（必ず首輪に装着すること）
名前、年齢、ワクチン接種の有無、連絡先などを記したもの
- ペットフードと水
人間も動物も同じ、少なくとも3日分を確保
- 写真とメモ
名前、年齢、ワクチン接種の有無、連絡先などのほか、身体的・性格的特徴、体重、病歴などのメモがあれば、捜すとき役立つ
- 常備薬
持病の治療薬、下痢止め、消毒薬など（人間と同じように）
- ケージやサークル
避難先で便利
- リードやリュック
リュックは猫や小型犬を入れるのに便利

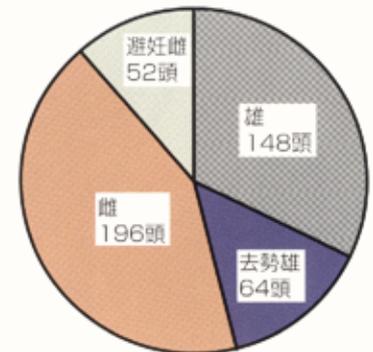
〈動物飼育者の義務〉

- ワクチン接種
感染予防のためにも
- しつけ
動物が邪魔もの扱いされないために
- 不妊手術
緊急時を想定すれば、重要なこと

被災犬



被災猫

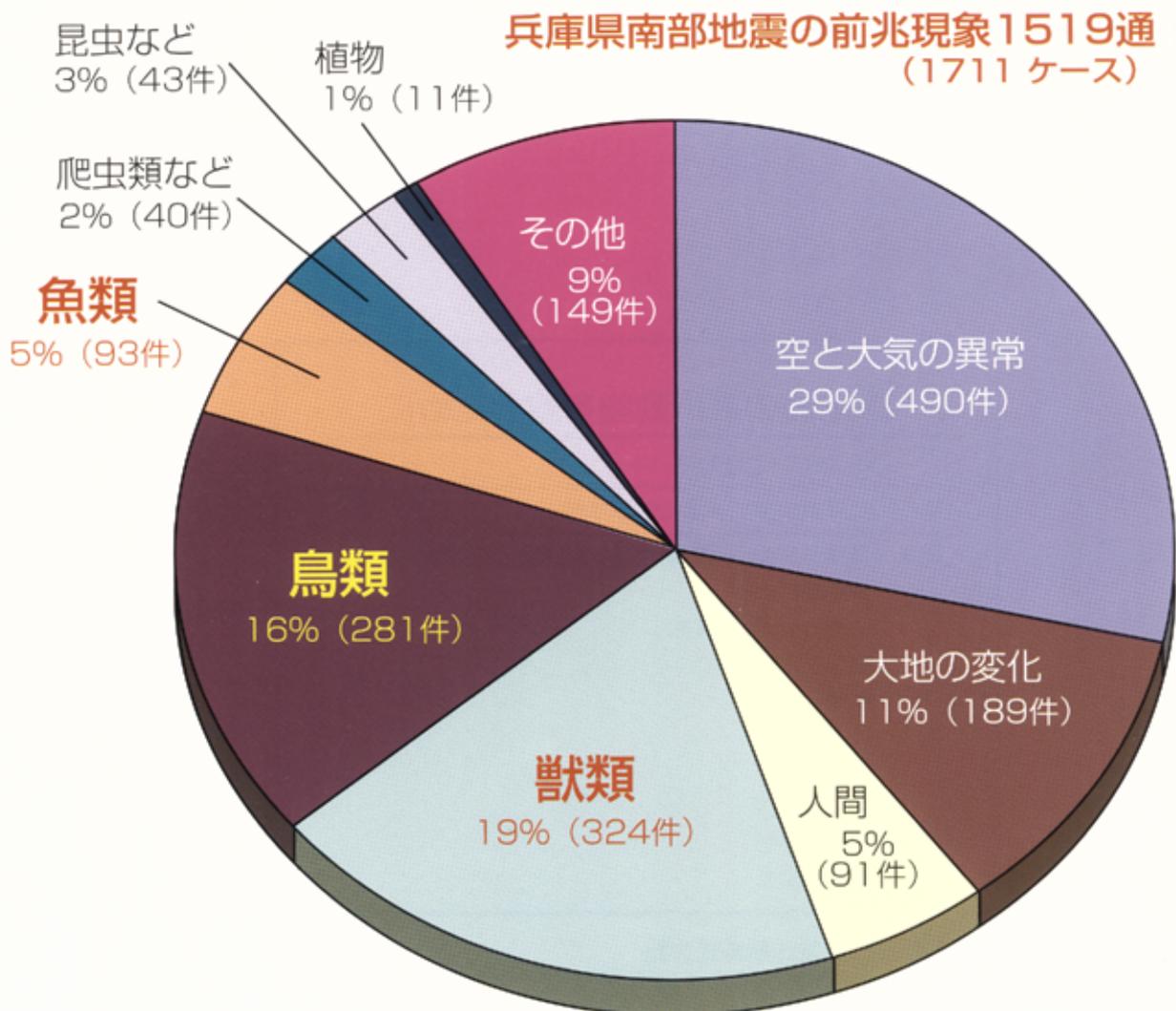


神戸および三田動物救護センターに収容された被災動物のほとんどは、去勢も避妊もされていなかった

地震感知

地震の直前に犬が散歩を要求して外出していたため、難を逃れた飼い主がいた
地震の前夜、鳥が一晩中鳴いていた
猫が地震の数時間前に暴れ出した
猫がいつもと違う場所で寝ていた
犬が地震の前夜寝なかった
地震前日より吠え続ける犬が多かった
地震の数時間前から散歩をせがみそわそわしていた犬がいた
庭で放し飼いの犬が、そわそわしたり、穴を掘ったり、屋内に入りたがったり、落ちつきが無くなった
りした
地震の3日前からビークルが犬舎にはいらず外で寝ていた

(「神戸市ならびに兵庫県獣医師会々員へのアンケート調査」から抜粋、資料篇参照)



(弘原海 清「前兆証言1519!」東京出版より)
(「阪神・淡路大震災シンポジウム」から、資料篇参照)

編集後記

年を越すと、大地震から2年になる。あちこちで、確かに復興の槌音がきこえる。その一方で、「あの震災」も人々の記憶から少しずつ消えてゆく。忘れてはならない。

その強い思いを抱いて、本誌の編集は進められた。繰り返された震災の歴史に「動物救護活動」を記した部分はない。全てが始めての経験であり、試行錯誤の連続であった。このことは、本誌の編集まで続いた。

考えるより、行動が先にあった。「人も動物も助けたい」人々が手を結び、懸命に動いた。そのことを記したのが本誌である。

今はじっくりと考えねばならない。なぜなら近代都市を襲ったはじめての大地震は数々の教訓を残したからである。残念ながら、本誌では、それらの教訓まで言い及ぶことができなかった。

本誌に記された各々の事実をもとに、この先のことをともに考えていきたい。

本誌の編集に当たり、貴重な資料をお寄せいただいた関係者各位ならびに諸団体にお礼を申し上げますと共に、出版に多大なご協力を賜った日新堂印刷株式会社に謝意を表したい。

平成8年11月30日

大地震の被災動物を救うために

平成8年12月1日

発行 兵庫県南部地震動物救援本部

編集 兵庫県南部地震動物救援本部活動の記録編集委員会
編集委員

太田 光明 (委員長)

杉原 未規夫

船越 久司

山本 尚毅

市田 成勝

松田 早苗

鷺尾 勝彦

旗谷 昌彦

印刷 日新堂印刷株式会社
神戸市中央区橋通1丁目1番9号



Thanks from Dr. Barby

KOBE JAPAN 1995,1,17

